



三雲祥之助と小川マリ 夫妻 一九五五年

三雲 祥之助

(一九〇二年七月十九日―八二年八月十九日)

京都市上京区出身。春陽会会員、武蔵野美術大学教授、武蔵野美術学園学園長を歴任。一九八三年、武蔵野美術大学に三雲奨学基金、三雲記念賞が制定された。武蔵野市のアトリエ兼住居は、二〇〇五年、夫人で画家の小川マリ夫人の没後、学校法人武蔵野美術大学に寄贈された。

1980 November

三雲祥之助筆「一九八〇年の十一月の感想」

若い頃、マチスやピカソなどの作品やその写真に接して、多少、気にそまぬ所があっても、世論のせいもあってか、そんな所でも感心していたものだが、六十歳を少し越してからは、漸く自分の見方というものが出来てきたのか、彼等の苦労した跡や、恐らく不満に思っていたであろうという所などが、目に映るようになった。

マチスも派手な色彩を大胆に駆使しながらも、決して器用な作家ではないと思うようになっていた。

最近病気になる迄は、毎年巴里に行つて近代美術館へは何回も行ったが、そこにある十数点の作品も、好きなものは次第に減つて、《画家とモデル》(一九一七年)、《奢侈、静寂、快樂》(一九〇七年)、《マグノリアのある赤い静物》(一九四一年)、それから小品もう一点ぐらいになつてしまった。

《奢侈、静寂、快樂》は、マチス三十八歳の頃の作だそうだが、若さと生氣にあふれた作品である。正に一生を通じての画期的な作品と言える。ボードレールの傑作『旅への誘い』を絵画にしたものである。私も大好きな詩で、太陽と海と船と、とろけるような暖かい光の中に眠りこけている都邑があり、そこには花あり、恋人があり、耐え難いノスタルジアの世界である。

一九〇七年の作品では、作者はそんな道具だてを使わず、女と花と海とその向こうに並ぶ二子島だ

1980 November

三雲祥之助筆「一九八〇年の十一月の感想」

けに絞っている。

彼はここで、左端の女の立像とかがみこんだ女体と、動的な女体とを組み合わせ、神経質で大胆でフレッシュな筆致を歌わせた色面で、すっきりとした心地よい画面を構成している。

この作品は、この主題を取り上げた第一回の習作とされている。

マチスはこの二年前、シニャックと一夏をすごした頃、スーラ、シニャックを中心に流行し出した点描で、この主題を取り扱っている。

この方は詩中の道具立てにより、忠実に、島や海や五人の女体、男一人を入れた宴の席にしているが、芸術的な主体性は乏しく、ただ道具立てだけを整えたといった程度のものに終わっている。

しかし、これをきっかけに、「生の歓び」への関心は強くなり、色彩的にも構図にもいろいろな試みをした作品が残っている。

南の海のある土地の暖かさ、生きる楽しさ、歓びの考えは次第に、色彩上でも構成的にも強くなってきた、遂にこのままできたのだろうかと思う。

そしてもう一步踏み出している。

コペンハーゲンの美術館にある同じ大きさの作品である。その方は現物を見ないので何も言えな

いが、写真だけで判断すると構図は全く同じだが、浮世絵に似た線描で三人の女体は描かれ、色彩はベタ一面の色面積に単純化されている。

マチスの狙いとのことだが、私には、第一回の習作の方が色面の楽しさ、構成の妙味を覚えるものだ。

特に右側に立っている女像は堂々としていて、ギリシャのカリアチッドの壮大さを見せているように思われる。特に驚くのは、(写真によって多少の相違はあるらしいが)向かって左の腕がすかと切つてあることである。この構図はこの女体にある鋭さを引き立て、下にうづくまっている円形の女体は、右上の白い空と映えて、微妙な対称をなしている。

一九七五年、私は巴里の近代美術館でマチスのデッサン展を見たことがある。

三点ばかり、この作品の素描が並んでいた。

その中の一枚は全く第一回の習作と同じ考えの許で描かれていた。左側の立像の女の腕もはっきりと、油絵と同じように切られていた。

また点描の《奢侈、静寂、快樂》の素描もあった。油絵では軽く右の方に一本の樹が聳えているが、素描でははっきりと現実の風景、村と島とを写生して、それを素描の下図にまとめている。

消しては描き、消しては描くため、紙がもけ特殊な精神化した表面となる。そして加えられる線は忽ち、作者自身のリアルを固定してしまうように見えるが、素描では、はつきりと現実にある樹と海上の島とを忠実に写生している。

それはマチスの画が現実の物から出発していることを物語っているようである。

彼の点、彼の素描は、その作品鑑賞の上で非常に重要である。

この文章の主題から離れて恐縮だが、その数多い素描をみてみると、描いては消し、またその上に描いて行くそのタッチの跡は、すごい迫力を感じさせられる。

つまり紙面そのものを描くこと、消すことによつて、作者は自分の精神の一部分にして行くかのように思われる。紙のこともけた跡も、木炭の跡も、全てが精神化されて行くようである。

その上に新たに加えられる、木炭、鉛筆、インクの点や線は、紙面の肌と共に決定的なものを表現することになるのではないかと思う。

そんな意味で、木炭はマチスの素描の中軸を成すもののように思う。

それから、ペンを使った素描がある。

えぐるような鋭い線と、デフォルマションも木炭素描とは違うが、木炭素描のエッセンスのように鋭く奔放に描かれている。

ペンの素描も、木炭素描の根底にあるが、女が想像以上に大判に描かれているのも迫力の要素になっていた。

それに較べると、晩年の筆と墨汁の素描は面白いものはあるが、心に迫るものは、私にはあまり感じられない。

*

老年は僕にとって、初めてのものなので、この未知のものに、どう対しているのかわからない。

今まで、一呼吸で出来たことが二呼吸、三呼吸しなければならぬのだ。ヨボヨボというのか、まさに、このことだと身に沁みる。

朝、起きて洗顔、ひげ剃りなどもの数でなかったことが、いちいち努力の対象なのだ。

数年前、肺にカビが生える病気になった頃、ある著名な先生に診てもらったら、打診、聴診、レントゲン写真のあと、

「ちよつとひどい様子や。ラッキーでしたね」とニヤリとした。

「閻魔大王をうまくかわしたね」とウインクしたようでもあった。

人間、いつ死ぬかわからんが、死ぬまでは生きている。寝たきりの時間が多くなっているのに、毎日繰り返す命は、一枚板となつて続く。生きている限り、闘いもない無限のものを考える。

僕はやはり少しは仕事をする。外から見れば変り映えもしない退屈な絵だろうけれど、描いている身には、時には二、三の絵具の組合わせの時に一瞬にして、すーっとした空間を感じたり、荘重な流動する音を感じたりしている。独り合点かも知れないが、それでもいい。

それが今の僕の最も大きい楽しみなのだ。それに、高齢と無関係に少しずつ、うまくなつて行くように思えるのも嬉しいことだ。

そして柄にもなく、それが僕のいない時代に少しでも、未知の人に、よろこびを与えていることを想像しているのである。

一九八〇年の十一月の感想である。